74　『新修本草』の薬名（項目名）について

岩間眞知子
茶の湯文化学会／美術史学会

『新修本草』は，中国史上はじめての勅撰本草書である．成立の経緯は，『証類本草』の中の「唐本序」に，次のように述べられる．「梁の陶弘景が著した『神農本草経集注（以下，『本草集注』と略称）』は外国の見聞が欠け，事柄は詮議を経ず，解釈は独学である．そのため陶氏の誤りを拾い，俗用の乱れを正したいと蘇恭（敬）が新しい本草の修定を請うたことに始まる」と．『新修本草』は『本草集注』を増補する形式を採用し，陶弘景が採録した『神農本（草）経』『名医別録』に無いと蘇敬らがみなした薬品を新たに付与した．『新修本草』で採録された薬は，現伝の『証類本草』では114種が確認できるが，岡西為人氏は本来115種であったとする（『本草概説』63頁）．

『新修本草』初出薬の各々を見ていくと，チベットやベトナムなど遠方（外国）の産出品，また陶弘景説の誤りを正して付与すると強く主張したものが多い．そのような『新修本草』初出薬の一つに茶があり，「茗苦檪（梫）」という薬名（項目名）で記される．ところが実際，茶は『新修本草』より約160年も前に成立した『本草集注』序録に記され，『本草集注』本文中の『神農本草経』薬「苦菜」の注にも，陶弘景は茶について詳しい記述を残していた．

『本草集注』序録で茶は「荼茗」と記される．東晋の郭璞が古字書『爾雅』「槚苦荼（槚は苦荼）」の槚を茶とみなして，注に「今呼びて早く採る者は荼と為し，晩に取る者は茗と為す」とするので，「荼茗」は早晩いずれの時期に摘んだ茶葉も含む言葉（呼称）と理解できる．

一方，『本草集注』本文の「苦菜」の注で陶弘景は茶を「茗」と言う．唐代の医書『千金方』や類書『芸文類聚』でも茶を示す項目名は「茗」一字である．「荼茗」とせず「茗」とするのは，一般に広く使用され理解される簡明な名称だったためであろう．宋代の類書『太平御覧』も「茗」，明の『本草綱目』でも「茗」を項目名とする．

すると『新修本草』の「茗苦檪（梫）」という薬名は，「茗」と「苦檪」に分解でき，一語ではない．これを「茗は苦檪」と解釈する書もあるが，目次の項目名も「茗苦檪（梫）」とし，宋代の『証類本草』もそれを踏襲し，一語のように扱う．

さて「苦檪」は，もとは「苦荼」であったと考える．先の郭璞の注に「蜀人はこれ（茶）を苦荼と名づく」とあるため，蜀では茶を「苦荼」と呼んだことが分かる．「苦荼」の「荼」は，茶も意味するがそれ以外にニガナ・あれくさなど多様な意味を持つ．「荼」一字では，茶であるか否かが明確ではない．そこで「苦」を付け区別したのだろう．すると「茗苦檪（梫）」は「茶荼」と同義の語を繰り返す二語となり，両者には「荼茗」のような意味の違いはなく，非常に奇異な薬名である．では『新修本草』初出のほかの薬名は，どうだろう．

まず訶梨勒・菴摩勒・底野迦などは，その地方の言葉（外国語）の音に漢字を当てた薬名と考えられる．胡椒・胡桐淚は胡地方の産品を表し，白赤烏（黒）など色の違いを冠した薬名もある．しかし「茗苦檪（梫）」のような構成のものは見当たらない．

さて木偏を付けた文字「檪」は，唐代の茶書『茶経』に「本草に出る」とあるので，『新修本草』にあった文字である．『新修本草』で蘇敬は「苦菜」を茶とする陶弘景の説は誤りで，茶は菜ではなく木類だとした．すると「檪」は，木類であることを強調し，茶を表した文字となる．江戸末期に小島宝素らが発見した古写本の『新修本草』で，「檪」は「梫」となっている．それは草類ではないことを一層明らかにするため，草カンムリまで取り去った文字と言うことになろう．その「檪（梫）」を蘇敬は加え，茶の薬名を「茗苦檪（梫）」とした，命名法はこのようになるのではないだろうか．